



高橋 栄一

ジェダイトメディスン
共同創業者兼代表取締役社長CEO

日本で、良い臨床を

写真は、1998年末、80歳のEdwin G. Krebs先生と34歳の私です。クレブス先生は1992年にノーベル賞(生理学・医学)を受賞後も、米国シアトルのワシントン大学で研究室を持って研究を続けていらっしゃいました。

私はワシントン大留学中に共同研究の機会に恵まれました。先生はとても優しい穏やかな方で、パステルカラーのiMacをデスクに置き、カジュアルな服にDバックを背負って校内を行く長身の姿は「とってもかわいい、おしゃれなおじいちゃん」でした。「(クレブス回路の研究で1953年にノーベル賞受賞の) Hans Krebs卿と間違われることがあったけれど、訂正しなかったのだよ」とおっしゃるときのいたずらっぽい笑顔が、私は大好きでした。

ノーベル賞の賞金を全て若者の教育にと寄付した話にも驚きました。先生は、噂で聞いていた「米国では、力があれば年齢にかかわらず研究を続けられる」実例でした。一方、過

去にいかにも業績があっても、今、力がなければすぐに退場を命じられる例を見聞きし、また「目的のために力を合わせて、何としても前に進む」強い意志と、その速く大きな結果を世に出すダイナミズムへの驚きを私は忘れません。

留学で本物の基礎研究に触れ、自分が本当にやりたいことを見つけました。それは、「日本で、良い臨床を」やることでした。ちょうどそのころ、世界の医療は、大規模臨床試験で証明された「エビデンス」を重視するようになっていました。ところが帰国した日本では「エビデンス」に沿った薬の適応症や量が使えないことをしばしば経験し、自分でそれを解決したいと思って製薬業界へ入りました。

それから20年余。ファイザー、アムジェンを経て進む今のこの道は、クレブス先生に指導いただいた時間と空間の中で決心した、「日本で、良い臨床を」という目標の途中だと思っています。

